



10月24日(木)～11月22日(金)までの約1ヵ月間、独立行政法人国際協力機構(JICA)の要請を受け、フィジー、バヌアツ、ソロモンの3カ国から11名の研修員を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を実施しました。

## INDEX

- インタビュー「2014年4月新設学科・コース紹介」
  - ・視機能科学科
  - ・健康スポーツ学科スポーツ教育コース
- 「第13回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
- 大学院生研究紹介
- 平成25年度「連携総合ゼミ」開催報告
- 学外実習体験記
- 国際交流のWA!「JICA研修実施報告」
- CAMPUS NEWS
- 伍桃祭を終えて
- 受験生のみなさんへ



# 医療技術学部 視機能科学科

現代社会のニーズに対応した『視機能のプロフェッショナル』を育成。

平成25年8月29日の文部科学省による設置認可を受け、いよいよ2014年4月に視機能科学科がスタートします。本学科開設にあたり、今社会から強く求められている「視能訓練士」の仕事や今後の展望、本学科が目指す人材育成について、阿部春樹先生にお聞きしました。

## 視能訓練士の現状と展望について

### ■ 視能訓練士の仕事とは？

視能訓練士は、昭和46年に制定された「視能訓練士法」に基づく国家資格をもった医療技術者です。当時の業務は「医師の指示の下に両眼視機能に障害のある者に対するその両眼視機能の回復のための矯正訓練およびこれに必要な検査を行うことを業とする者」と規定されていました。その後、平成5年の視能訓練士法の一部改正により、医師の指示の下に眼科に係る検査（人体に影響を及ぼす程度が高い検査として厚生省令で定めるものを除く。）を行うことを業務とすることができるようになりました。視能訓練士ができる検査とは、臨床で一般的に行われている眼科諸検査全般を指し、検査項目は多岐にわたっています。更に現在では、眼科診療に関わる視機能検査全般、斜視および弱視の訓練指導の他、自治体が行う3歳児健診や成人病健診などの予防医学分野への参加、視機能低下者のリハビリ指導などの幅広い業務を担当しています。

### ■ なぜ今、視能訓練士が社会から求められているのですか？

現在の眼科診療において、視能訓練士は診断および治療に関わる検査を担当する職種として非常に大切な存在となっています。過去に日本眼科医会は、昭和54年より眼科コメディカル（いわゆるOMA）の養成教育を行い、認定試験により多くのクリニックで業務の補佐を担う眼科コメディカルを雇用してきました。当時は視能訓練士の有資格者が全国で749名と寡少でした（図1）。その後、視能訓練士養成校の増加、そして高い医療水準が求められる時代背景から世論が無資格者の医療行為について寛容でなくなり、眼科検査は国家資格を持つ有資格者によって行われるべきことを確認し、平成23年度からは眼科コメディカル全国統一試験を廃止しました。このことで、より専門性の高い視能訓練士の必要性が再認識されました。

近年、眼科医療における手術療法、薬剤療法にはめざましい進歩がありますが、その一方で未だ治療法の確立されていない疾患も多く、加えて、糖尿病や高血圧など全身疾患から併発する眼科疾患も増加の傾向を辿っています。視覚は外界の情報のおよそ80%以上を担う（図2）ため、視覚に障害を持つと情報量の不足からQOLが著しく低下します。今日では、医療の目的が疾患の治療のみではなく、疾患を有する患者のQOLの向上へと変化してきています。今後、視能訓練士が低視覚者に対するケア（ロービジョンケア）を行う眼科医療施設が増加することが予想されます。

### ■ 本学科ではどのような人材を育成していきますか？

本学科では、視能訓練士の国家試験受験資格と同行援護従業者（視覚障害者）\*1資格を併せ持つ独自のカリキュラムを配置することで、より患者（対象者）の心に寄り添えるQOLサポーターを育成します。

また、視覚科学に関する教育・研究機関での経験豊富な教員や臨床現場の第一線で活躍する教員が一丸となって、進歩する眼科医療に迅速に対応できる視能訓練士の人材育成を図ります。さらに保育園・幼稚園、高齢者福祉施設、特別支援学校（盲学校）での実習を通して、子どもの発達から、高齢者の加齢現象まで幅広く学び、ライフステージごとに対応した検査技術・訓練および支援技術を持った人材育成にも力を入れます。このような学外実習は、多職種間での連携やコミュニケーションスキルを身につけるトレーニングにもなります。

学内実習では、最新の眼科医療システムを採用し、画像ファイリングシステム（図3）の導入により、各学生がタブレットPCでデータを閲覧、管理することで、検査結果の説明のトレーニングなど、臨床現場に即した実践的な実習が可能となります。

充実した教育内容および施設・設備から、チーム医療の一員として医療・福祉・教育分野で活躍しう人材の育成に努めます。

### ■ 本学科を卒業した学生に、どのような活躍を期待しますか？

現在注目されているiPS細胞による再生医療では、加齢黄斑変性\*\*2の患者を対象とした臨床研究が進められています。「再生医療はリハビリとセットで完成する。」と言われており、研究者はルーペなどの視覚補助具の訓練で読み書きできるようにする「ロービジョンケア」を併せて行うことで効果が現れるものであることを強調しています。近未来の再生医療、人工網膜の時代では多種多様な検査、ケアが必要となり視能訓練士の担う役割はますます大きくなると予想されます。高度な知識、技術そして医療従事者としての高い倫理観が求められることは言うまでもなく、分野を超えた多職種との連携（チーム医療）に加わることも必要となります。時代のニーズに敏感であり、眼科医療の発展に尽くす視能訓練士に成長してもらいたいと願います。

※1 視覚障害により、移動に著しい困難を有する障がい者等につき、外出時において、当該障がい者等に同行し、移動に必要な情報を提供するとともに、移動の援護その他の厚生労働省令で定める便宜を供与する（障害者自立支援法第5条4）。

※2 網膜の中心部直径6000μmの範囲は黄斑とよばれ、ものを見るときに最も大切な動きをする。黄斑の動きによって良い視力を維持し、色の判別をするが、この黄斑が加齢に伴って様々な異常を来たした状態をいう。

図1 視能訓練士有資格者数の推移  
出典：視能訓練士の現状と展望 2010年

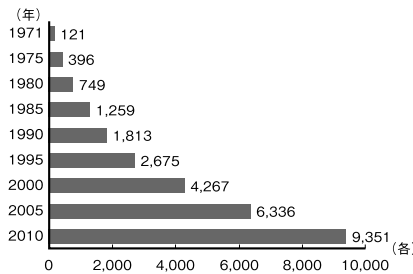


図2 外界の情報取得に使われる知覚機能の割合

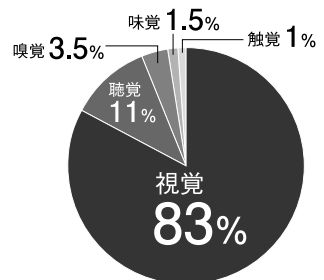


図3 眼科画像ファイリングシステム  
各検査器機により撮影・測定されたデータは保存され比較、拡大表示をはじめ、データ毎のコメントの記入、並べ替え、動画撮影等の様々な機能を利用して診断、診察の効率化やインフォームドコンセントに利用されます

# 健康スポーツ学科 スポーツ教育コース

夢を叶える「4コース制」に生まれ変わります。

健康スポーツ学科では、これまでの「健康医科学コース」「コーチング科学コース」「スポーツマネジメントコース」に加え、2014年4月より新たに「スポーツ教育コース」を設置し、4コース制に生まれ変わります。本コース開設にあたり、昨今のスポーツ・体育を取り巻く環境の変化や求められるスポーツ教育について、西原康行先生にお聞きしました。

## 高い指導力を持った教師やスポーツ指導者の育成を目指して

### スポーツ教育コース開設の背景は？

～現在のスポーツや体育を取り巻く環境について～

子どもは、仲間と共に身体活動を伴う遊び(=スポーツ活動)のなかで、社会性が醸成され、体力を高め、結果として「生きる力」を育むことができると言われています。ところが、現代社会に生きる子どもたちは、ジャンクフードを食べながら、独りでゲームにいそむ姿があるように、必ずしも健全な環境で成長しているとは言えません。それが、昨今の子どもの体力低下、いじめ問題等にも反映されています。また、スポーツを行っている子どもにも問題があり、幼少期から一つのスポーツ種目しか行わないことから、筋力・持久力・調整力のバランスのとれた身体を成さず、怪我をしやすい身体になっていると指摘されています。

### 本コースではどのような

人材を育成していきますか？

スポーツ教育、指導の現場では、子どもたちが「スポーツや運動の楽しさ」を実感して、日常的にスポーツや運動を自ら行えるように導くことが大切です。本学健康スポーツ学科のスポーツ教育コースでは、全国でも数少ない「教材作成」や「教材の活用方法」を学ぶ専門科目を配置して、子どもたちの特性に合わせ、かつ、子どもたちが「楽しい」を実感できるような教育方法について学ぶと共に、豊富な経験を持った小・中学校教員の先生方から実践的な指導方法を学ぶことができます。そのため、子どもたち

の目線に立ち、子どもたちが「楽しい」と思えるような体育の授業展開やスポーツの指導展開ができる実践力のある高い指導力量を持った学校教師やスポーツ指導者を育成していきます。

### 本コースを履修した学生に、 どのような社会での活躍を期待しますか？

上述の力量を最も直接的に発揮できるのは、小学校の教員と中学校の保健体育教員であるため、教員採用試験に合格して、全国の公立小学校、中学校の教員になることを期待します。しかしながら、小・中学校の体育の授業は、わずか週2時間であり、これだけでは上述のような子どもの健全な育成は不可能です。そこで昨今は、学校以外の地域における「総合型地域スポーツクラブ」が設立されたり、民間スポーツクラブや健康増進施設における子ども対象プログラムも増えていきます。そのため、民間スポーツクラブや健康増進施設でのスポーツ指導者としての活躍も期待されます。さらに、国際的には日本の教師やスポーツ指導者の力量は高く評価されているため、日本での教育経験を積むことで、海外の教育機関で活躍することも期待しています。



健康スポーツ学科

教授 西原 康行

■専門分野：暗黙知研究

■学 位：体育学修士  
教育学修士  
博士(教育学)



## 健康スポーツ学科

## 地域に根ざした取り組み

### ■地域の子どもへの社会貢献 「スポーツ教室」の開催

スポーツ教室として「陸上教室」「子どもの体力アップ教室」「水泳教室」を開講しています。多くの子どもたちに運動の楽しさを伝え、運動に親しんでもらうことを目的として、本学施設を活用し、教員指導の下で学生が自分の専門を活かしながらコーチとして教えています。また、「文武両道コース」として、スポーツ指導だけでなく学習支援も行います。これらの取り組みは、地域の子どもたちへの社会貢献はもちろん、学生自身の実践力の向上にも繋がっています。今後は陸上、水泳以外の種目への拡大も予定しています。



スポーツ教室 子どもの体力アップ教室

### ■地域住民との交流 「いきいき運動教室」の開催

大学の人材・施設を活用した地域住民のQOL維持・向上のための健康増進事業、および、「健康運動指導士」の受験資格取得のための実践現場実習を目的として『いきいき運動教室』を開催しています。体育館と室内ウォーキングコースを利用しウォーキング、ストレッチング、筋力トレーニングなどを行う陸上運動



いきいき運動教室 水中運動部門

部門と屋内プールを利用し水中エクササイズを中心に、行う水中運動部門に分かれ、健康運動指導士の資格を持った教員と学生が指導にあたっています。運動教室では初回と最終回に体力測定を実施して、参加者の体力レベルに合わせた運動指導を行っています。

# 「第13回新潟医療福祉学会・学術集会」開催報告

新潟医療福祉学会は、本学が設立されると同時に、本学を中心にした新潟県内の健康と医療福祉に関わる職業を専攻されている人たちの研鑽の場として立ち上げられました。また、個々の職能者のみを対象とする学会ではなく、健康と医療と福祉に関連したすべての職種の人たちを対象にした幅広い職能者が集う貴重な機会として、情報交換しながら、「チーム医療」を実感できる場にもなっています。

今年度は、10月19日(土)、本学キャンパスを会場として、一般演題9題やポスター発表56題、特別講演およびシンポジウムを含め全部で72題の発表が行われ、発表後には会頭賞・奨励賞の表彰が行われました。

## テーマ

「現場から求められている医療・福祉系大学の課題」

## 特別講演

「医療・福祉系大学に何を期待するか」

講師：内山 聖（魚沼基幹病院 院長、前新潟大学歯学部総合病院 院長）



## シンポジウム

### 【現場から求められている医療・福祉系大学の課題】

「看護師の立場から」野本 伊江子（西新潟中央病院 看護部長）

専門学校と大学の教員の違い、および、医療現場と臨床指導者との協同の必要性について

「理学療法士の立場から」深川 新市（新潟県理学療法士会 会長）

学外実習における時間の短縮に伴い教育の低下が懸念されていること、さらに指導者数の低下、実習先の確保の困難、学生と指導者とのコミュニケーション不足によるクリニカルクラークシップ(clinical clerkship)の難しさについて

「臨床検査技師の立場から」渡辺 博昭（新潟県臨床検査技師会 会長）

臨床検査技師のこれからの方向性として、スペシャリストであると同時にジェネラリストである必要性について

「臨床工学技士の立場から」後藤 博之（新潟県臨床工学技士会 会長）

歴史の浅い資格であり、「2010年の業務指針」の変更に伴い業務が拡大したことを受けての、これからの臨床工学技士の役割について

「管理栄養士の立場から」稲村 雪子（新潟県栄養士会 会長）

「在宅療養者のステージに合わせたQOLをめざして」と題し、病気にさせない、重症化させない「在宅におけるQOL」と、大学教育における「職業倫理」の早期教育の重要性について

「社会福祉士の立場から」高野 八千代（南魚沼福祉会 魚野の家 施設長）

専門性を認識できる知識の必要性、社会支援システムと各専門職の協同の重要性について

当日は、魚沼基幹病院院長の内山 聖先生から、医療現場や医育機関の中での「多職種協働」による実践(IPW: Inter-Professional Work)や教育(IPE:Inter-Professional Education)の重要性についてご講演をいただき、併せて魚沼基幹病院での開設に向けての準備構想も紹介されました。

シンポジウムでは、「現場から求められている医療・福祉系大学の課題」と題し、6人の先生方にそれぞれの医療職種の立場からお話をいただき、他職種でありながら多くの共通の問題点が浮き彫りとなるなど、今後の課題解決に向けて非常に有意義なシンポジウムになりました。

また一般演題では、[本学研究推進機構 プロジェクト研究センター]における5部門の研究結果が報告されました。

その後、会頭賞・奨励賞の表彰が行われ、会員・非会員94名、大学院生・学部生171名、講演者など約270名が一堂に会した会場では、終日熱心な討論が繰り広げられ、参加者は大いに「チーム医療」を実感したようでした。

本学術集会の特別講演およびシンポジウムの一部については、新潟医療福祉学会誌に掲載予定であり、多くの会員・賛助企業のご理解・ご協力のもと無事大会を開催することができましたことを改めて御礼申し上げます。

次回、第14回新潟医療福祉学会・学術集会は、社会福祉学部の丸田秋男副学長・学部長を大会長として開催される予定です。来年度も多数のご参加をお待ち申し上げます。



# 大学院生研究紹介

## 大腿義足ソケット内に働く圧力の研究

保健学専攻

義肢装具自立支援学分野1年 秋場 周

私は2013年3月に、本学の義肢装具自立支援学科を卒業し、地元新潟にある義肢装具製作会社に就職しました。大学院へは仕事が終わってから通っています。周囲からは大変だと言われることがありますが、臨床現場と大学院での研究の両方を経験できることは医療専門職に携わる者として、とても充実した環境だと感じています。

現在、私は真柄教授、東江教授の指導のもと、「大腿義足ソケットの適合に関する研究」に取り組んでいます。義足は、人の関節の機能を復元し、より正常で安全な歩行をするための継手、全体の骨組みの役割をするパイプ、そして健全な足の機能を再現するための足部など、様々なパーツから構成されています。その中でも特に重要なものの一つにソケットがあります。

ソケットとは、切断した四肢(断端)と義肢を接続するインターフェイスです。義足ソケットには、ユーザーさんの体重を支える体重支持、歩いている際に義足が外れないようにする懸垂、義足の安定性や振り出しを行うための力の伝達など、いくつかの機能があります。それらの機能を確実に発揮させるためには、義足のソケットがユーザーさんの体(切断した部分の断端)に痛くなく快適で、しっかりと適合している必要があります。

そこで私は大腿義足ソケットの適合状態を分析するために、圧力

センサをソケットに埋め込み、いつ、どのような力が加わり、変化しているのかを計測しています。また同時にユーザーさんの装着感を聴取して、圧力と装着感の2つの視点からソケットの適合状態を分析しています。

現在の臨床現場では、義足ソケットの適合状態を客観的に評価する方法はありません。義肢装具士が医療現場に携わり、培われた勘、そして実際に義足を着けていただくユーザーさんの主観で評価されています。しかし、ソケットの適合状態を客観的に評価することができれば、その人にとって

の良いソケット、悪いソケットが明確になると共に、私たち義肢装具士も勘に頼ることなく、ユーザーさんにより良い義足を製作し、提供することができるようになります。

大学院での研究の成果を日々の臨床に活かし、ユーザーさんにとってより良い義肢装具を提供できるようになることが私の目標です。



## 中米ニカラグアにおける障害児・者リハビリテーションの現状と課題

社会福祉学専攻

保健医療福祉政策・計画・運営分野2年 村山 健一郎

私は現在、社会福祉学専攻の修士課程に在籍しながら、日中は、「はまぐみ小児療育センター」で理学療法士として勤務しています。研究テーマに明示したように、2011年3月より2013年3月までの2年間、中米のニカラグアで青年海外協力隊員として、障がい児通所施設において、ニカラグア人の同僚たちへの理学療法の知識・技術移転を目的に活動してきました。私はニカラグアにいた2012年4月に本学大学院に入学し、帰国するまでの1年間は普通の活動に加えて研究活動も行ってきました。このように青年海外協力隊の任期である2年間のうちの1年間を現地で活躍しながら、大学院生のフィールド研究として単位を認める本学大学院独自のJICAプログラムを活用して学んできました。

ニカラグアという国は、北海道と九州を合わせたくらいの国土を持ち、人口は新潟県の約3倍の600万人を有し、80年代からの繰り返される内戦と90年代の自然災害の影響で国民の3分の2が貧困状態の中米最貧国と言われている国です。停電や水道が止まることは日常茶飯事です、それでもニカラグアの人々

は明るく、力強く生きていることが印象深く残っています。

ニカラグアの総人口に占める障がい児・者の割合は10%超とも言われています。その障がい児・者を支えるリハビリテーションはまだまだ発展途上の技術が多く、特にチームアプローチという点では先進国に比べると遅れていると感じました。「なぜチームアプローチが実現できていないのか?」「どうすればリハビリテーションの職場に定着するのか?」という提言も今回の研究で示すことができると考えています。

2013年の4月からは新潟での大学院生活が始まり、多くの社会人院生の方々と授業やプライベートで意見交換する中で、理学療法からみる社会福祉と社会福祉からみる理学療法では幾通りもの見え方があると感じています。新たな知識と新たな先生や仲間に出会えたことが大学院に入学した大きな意義だと感じています。



# 平成25年度 連携総合ゼミ

## 開催報告!

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

ゼミでは、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。

本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟薬科大学、日本歯科大学短期大学部、フィリピンのアンヘルズ大学の学生がチームの一員として加わり、国際的な視野が広がるなどさらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

連携総合ゼミの流れ

①自己学習を行い自身が担当する専門職を理解

②自己学習の成果をグループ内で発表し他の専門職を理解

③各専門職の立場から意見を出し合い支援策を共有

④協働して最善となる具体的な支援プランを作成

⑤パワーポイントを使用して研究成果をグループ発表

### Report. 1

#### 開発途上国における村のヘルスケアと障害のある人々へのリハビリテーション 理学療法学科 准教授 古西 勇

多大学、多職種、多国籍で連携!

私たちのゼミでは、本学の6学科8名と他大学1名からなる日本の学生9名に加え、フィリピンの大学から2名の学生が参加し、多大学、多職種、多国籍での連携にチャレンジしました。学生たちが皆で一致団結して取り組んだのは、フィリピンに実在する一人の障害のある幼児に対する支援策を考えることでした。日本では受けられるのが当たり前の医療や福祉サービスがフィリピンではほとんど受けられないということや、経済的に恵まれない家庭であるという現状の中で、「自分たちがもしそこにいたら何ができるだろうか?」と、それぞれの目指す職種の専門性から案を出し合いました。議論はすべて英語で、パワーポイントでの発表は、日本の学生は英語を、フィリピンの学生は日本語を交えながら、全員が交替で行い団結力を示しました。

フィリピンの学生の一人、ジュリア・ニコル・ボソレイユさん(18歳、米国籍)は「あの1週間は決して忘れることのないことを自

分に教えてくれた」と、もう一人のジアネラ・アレックス・アルガオさん(20歳、フィリピン国籍)は「最善の成果をもたらすことができるよう皆が時間と労力を惜みず、その勤勉さにとっても感激した」と帰国後に感想を送ってくれました。今回の日本の学生たちは、決して英語が得意な人たちだけが集まったという訳ではありません。つながり合おうという気持ちと覚悟があれば、言葉は一つの手段でしかないことを、参加した全員が感じてくれたと思います。そして何よりも、つながり合うことを楽しむ、そこから新しい世界観を生み出すということこそが、連携の醍醐味です。

ゼミがあった日の昼休みに、キャンパスの中庭で昼食会を開催しました。フィリピンの学生が調理してくれたフィリピン料理と日本の学生が一人一品持ち寄ってくれた手料理をテーブルに並べ、青空の下、皆で大いに楽しみました。料理の違いは味わってこそ楽しめます。文化の違いも理解し合うことでお互いが豊かな気持ちになれます。今後も、特色のあるゼミとして、フィリピンの大学から学生を招いての連携教育に取り組み続けたいと考えます。



#### 参加学生からの感想・コメント



多職種で症例検討を行ったことで多くの考えに触れることができ、毎日学ぶことばかりでした。さらに、慣れない英語を使用して討論や発表を行えたことは非常に貴重な経験となりました。参加して本当に良かったです。(理学療法学科 川村 彩莉)



各専門職や海外の方と図や専門用語を用いて意見交換することができました。職種間で連携してアプローチすることは、多角的に対象者を見ることができ、より質の高い援助ができると感じました。(義肢装具自立支援学科 嶋見 優太)



自分の職種として何ができるのかを他職種の役割を踏まえたうえで考えました。大学在学中にこれだけの職種が集まって連携を図れることは貴重な経験であり、今回参加できて良かったと思います。(健康栄養学科 山口 秀子)



英語が苦手でも意思を上手く伝えられず、もどかしい時もありましたが、みんなで協力し言葉の壁を乗り越え、一つの目標に向かって頑張ることができました。とても内容が濃く、あっという間の1週間でした。(健康スポーツ学科 今川 詩織)

## Report.2

## 児童虐待(ネグレクト)に伴う精神発達遅滞児への成長・発達支援

看護学科 准教授 松井 由美子

心をつなげた  
連携総合  
ゼミ活動

本事例は、実際のケースをもとに作成されたものです。連携総合ゼミで使用して今年で3回目になりました。今回は新潟薬科大学から2名の学生さんが参加され、これまでで一番多い職種での事例検討となりました。本学の理学療法・作業療法・言語聴覚・義肢装具自立支援・健康栄養・健康スポーツ・看護・社会福祉の8学科から各1名ずつと薬科大学から2名の計10名のメンバーで構成されたチームです。

8月のオリエンテーションの後、コミュニケーションツールのNOTAとLINEを使って、学生による活発な自己紹介を兼ねたWEB会議が始まり、情報交換や疑問点の解決を図るなどメンバーシップが発揮されていました。その効果もあって9月のオープニングからグループワークはスムーズに展開され、ファシリテーターの教員はほとんど見守る姿勢で参加しました。学生たちの活動の中で特に素晴らしいと感じたのは、子どもの日々の生活に焦点を当て、食後の口腔ケアについて取り上げた時に、このグループには参加していない職種で他のグループメンバーであっ

た日本歯科大学短期大学の学生さんに直接意見を伺ったことです。歯科衛生士の専門的な話を聞ければもっと良い工夫ができるのではないかとグループで意見が一致したからでした。そのあと快く要請に応じてくださった歯科衛生士として参加した学生さんから実践面の助言をいただき、支援策に取り入れることができました。

本事例のように児童虐待の影響を受けたと思われる発達障害は、虐待の増加と共に年々深刻さを増しつつあります。その背景には養育者との間の愛着が形成されないことがあり、愛着障害の修復という困難な課題に学生は真剣に取り組むことができました。子どもの成長・発達支援のプランを練る中で、支援者との間に再び愛着を形成することができれば、食べることや遊ぶこと、特別支援学校で学んでいくことなど、少しずつ楽しみを見出していけるのではないかと思います。最終的にはメンバー全員の心をつなげたのではないかと思います。学生たちの思いやりと行動力にあふれたセッションに未来の専門職のパワーを感じました。卒業後それぞれの現場でその力を発揮していただければと思います。



## 参加学生からの感想・コメント



私は、連携総合ゼミを通じて多職種連携の重要性を改めて実感すると共に、各職種の職域を知ることができました。また、学生同士で一つの事例に対して語り合えるという貴重な経験は、将来の糧になると強く感じました。(理学療法学科 渡辺 雅也)



私は連携総合ゼミに参加し、連携することの楽しさを知ると同時に難しさも実感でき、大変良い機会となりました。自分の仕事を他職種へ伝えることに苦労したことが印象的です。他職種について知ることができただけでなく、自分の職種をより理解することができました。(言語聴覚学科 神田 侑)



一人ひとりがそれぞれ知識を持ち寄り、互いの意見を尊重し、協力して結論を導き出しました。それぞれのアイデアでホワイトボードが埋まったのが印象的です。「笑顔で楽しみながら取り組む」、これこそがグループワーク成功の秘訣だと思いました。(義肢装具自立支援学科 立川 円)



他学科、他大学の学生と一つの問題に対し様々な分野から意見を出し協力することは、とても新鮮で楽しかったです。一人を助けるためには、多くの人が必要なのだと学ぶことができました。貴重な経験ができて良かったです。(健康スポーツ学科 重山 奈桜)

## 平成25年度 連携総合ゼミ事例テーマ一覧

- 脳性まひ(疑い)児と育児不安をもつ母親への成長・発達支援
- 児童虐待(ネグレクト)に伴う精神発達遅滞児への成長・発達支援
- 中高年者のメタボリックシンドロームの改善(健康系)
- 筋委縮性側索硬化症(ALS)ケースの在宅療養実現への支援
- 私も町のような人になりたい(精神科領域)
- 大阪市における小学生虐待死事例の検証
- 切迫早産・妊娠高血圧症候群で入院が必要になった妊婦への援助
- 開発途上国における村のヘルスケアと障害のある人たちへのリハビリテーション
- 高齢者糖尿病合併症の支援策
- 発達障害児の特別支援教育における外部専門家との協力



# 学外実習体験記

本学では今年度、9学科が学外実習を行いました。

各専門職として高い実践力を身につけることを目標とした学外実習の成果を報告します。

## 新潟に貢献できる理学療法士に

理学療法学科 4年 野口 綾利



今回の実習では、大学で学んできた検査測定・評価に加えて治療を行わせていただきましたが、日々変わる患者様の様子に合わせてアプローチを変えることや患者様の今後の様態の変化を予測していくことは難しく、悩む場面が多々ありました。しかし、実習指導者の先生をはじめ、多くの理学療法士の先生から様々なアドバイスをいただくことで乗り越えることができ、学内だけでは学ばれない多様な考え方やアプローチ方法を身につけることができました。

また、私が担当する患者様の日常生活動作について作業療法士の先生からお話を伺うことや、失語症でコミュニケーションをとることが困難な患者様との関わり方について、言語聴覚士の先生からアドバイスをいただくなど、他分野のリハビリスタッフと関わりを持つ機会があり、他の専門職の理解も深めることができました。

今回は地元である長岡の病院での実習ということもあり、実習を通して「地域の方々の助けとなる理学療法士になりたい」という思いが一層強まりました。今後は、経験したことや学んだことを活かし、新潟に貢献できる理学療法士になれるよう努力し続けていきます。

## どの分野にも共通した想い～作業療法士の魅力～

作業療法学科 4年 小林 茉莉奈



私は、3年次には脳神経外科病院や老人保健施設、4年次には整形外科病院や精神病院など、様々な分野の病院や施設で実習をさせていただきました。

実際の作業療法の場面を見学したり先生方とお話したりする中で、臨床現場における先生方の考え方や患者様をみる視点、実際のアプローチ方法はそれぞれ勉強になりました。どの病院や施設の先生方も従事している分野や患者様への想いが強く、様々な分野の作業療法士に魅力を感じました。

実習においては、出会った患者様の笑顔や作業する中での「楽しい」「嬉しい」という言葉が非常に印象に残っています。これは先生方が、障がいを持ち辛い思いをしている患者様の前向きな気持ちを引き出しているからだと感じ、将来はそのような患者様に寄り添える作業療法士になりたいと強く思いました。

私は今、小児分野に関心を持ち、子どもに関わる仕事に就きたいと思っています。実習で出会った先生方は、それぞれ従事している分野への想いが強いからこそ、患者様のために必死になれるのだと思います。私も自分が目指す作業療法士として働くことができるように頑張ります。

## 評価実習を通して学んだこと

言語聴覚学科 3年 小林 麻衣



私は、東京都杉並区にある河北リハビリテーション病院にて、3週間患者様の評価実習をさせていただきました。患者様を直接評価することは初めての経験で、大学で学んだ知識だけでは通用しない場面が多々ありましたが、病院の先生方から丁寧なご指導をいただくことで、乗り越えることができました。



また、患者様の中には、ご自分の病気について強く認識しており、先生方に悩みを相談する方もいらっしゃいました。先生方は患者様の悩みをしっかりと受け止め、病気についての説明をしたり、患者様の気持ちに共感したりしていて、言語聴覚士の仕事には専門的な知識だけではなく、患者様の気持ちに寄り添えるような人間性が必要であると改めて気づくことができました。

今回の実習では、言語聴覚士の魅力を今まで以上に感じる事ができ、言語聴覚士を目指す気持ちがより強くなりました。この経験を今後の勉強や4年次の総合実習に活かせるよう努力していきます。

## 患者様に伝える大切さ

義肢装具自立支援学科 4年 松原 千裕



私は、5週間にわたって義肢装具製造販売企業で、患者様の身体の型をとる採型や、装具の修理等を体験させていただきました。

今回の実習を通して感じたことは、患者様や他職種の方々に分かりやすく伝えることは思った以上に難しいということです。実習中私が患者様に装具の装着方法を説明したとき、上手く伝えられないことがありました。そんなとき実習指導者からは、患者様に装具の効果や装着時のポイントを短時間でわかりやすく伝えることができなければ、装具を使用していただけられないこともあるため、説明方法や話し方が重要である、と伺いました。私は、今まで以上に声の大きさや説明方法を工夫しなければならぬと改めて実感すると共に、患者様の声を聴きとることの大切さも改めて感じました。今後、自分の意見を分かりやすく相手に伝えることを常に意識し、少しでも患者様の立場に寄り添うことのできる人になりたいと思います。



## 臨床栄養学実習を経験して

健康栄養学科 3年 三宅 志織



私は、県立がんセンター新潟病院にて約3週間の学外実習をさせていただきました。学校から離れ、臨床現場における管理栄養士の業務を実際に見聞きすることで、今まで知識として得ていたものを、直接五感を通して学ぶことができました。

栄養管理や給食管理、栄養指導など多くの業務がある中、私が最も感銘を受けたものが栄養指導でした。大学の授業では、外部の方に対して行った栄養相談で、一人の対象者にすら準備に時間がかかった私たちと違い、病院での栄養指導はその場で指導内容を考え、フードモデルや資料媒体を効果的に用いて、短い時間の中でも適切で分かりやすく指導されていました。基本的な栄養知識はもちろん、患者様との信頼関係を築くためのコミュニケーション能力も重要であると改めて実感しました。

この実習で、学外でなければ学ぶことのできない数多くの貴重な経験をさせていただき、今の自分に足りないもの、これから身につけるべきものを明確にすることができたと思います。実習で学んだことを十分に活かし、今より成長できるように一層努力していきたいです。

## インターンシップ実習での学び

健康スポーツ学科 3年 齊藤 貴広



私は、地元である南区の白根カルチャーセンターで10日間のインターンシップ実習をさせていただきました。私が配属になったのはトレーニングセンターで、主な仕事は高齢者の方の運動教室のお手伝いでした。

実習で印象に残ったことは、スタッフの方が利用者の皆さんと積極的にコミュニケーションをとって、意欲を引き出していたことでした。私自身、最初はとまどってしまい、あいさつ程度しかできませんでした。しかし、スタッフの方々の姿を見て、コミュニケーションをとることの大切さを改めて実感しました。そのため、実習の終盤では自分から声をかけるように心がけ、利用者の皆さんと楽しく会話できるまでになりました。

また、今回の実習で、自分から積極的にコミュニケーションをとることが、人間関係を築く第一歩であると学ぶことができ、この経験を今後の大学生活に活かしていきたいです。お世話になったカルチャーセンターのスタッフの方々や利用者の方々に大変感謝しています。

## 患者様から学んだこと

看護学科 3年 肥田 公則



私は3週間の老年看護学実習において、循環器疾患を抱える高齢の患者様を受け持たせていただきました。

その中で高齢の患者様に対して尊重して接することの大切さを再認識し、またそれが患者様のQOL向上につながると感じました。私が受け持った患者様は控えめな性格で訴えが少なく、また入院生活の中で気分転換や楽しみを見い出せずにいるという状況でした。私は実習当初、患者様の疾患からくる身体的特徴を理解しておらず、患者様との関わりの中で戸惑うことが多くありました。しかし、実習指導者からアドバイスをいただき、患者様に対しての言葉づかいや話し方、患者様を尊重した態度と傾聴的な姿勢をとることを心がけました。すると患者様は徐々に私に対して思いを伝えてくれるようになり、また患者様の日々の変化を感じ取るできるようになりました。そこから患者様の疾患や特徴、個別性に合った援助を導き出すことができ、患者様のQOL向上につながれたのではないかと思います。今後の実習では、今回学ばせていただいたことを活かし、患者様にとってより良い援助を提供できるよう、今まで得た知識や技術をさらに向上させていきたいです。

## 相談援助実習を終えて

社会福祉学科 3年 松尾 美希



私は、出身地にある新発田市社会福祉協議会で約1カ月間実習を行いました。大学の講義や演習で学んできたことを確認しながらの実習でしたが、実際に福祉現場に出てみて、体験しなければならなかったことが多くあり苦勞もりましたが、充実した実習を行うことができました。

今回の実習を通じて感じたことは、他職種や他機関との連携の大切さです。大学では連携教育の大切さを学んできましたが、現場で生の連携を見せていただいたことで、その重要性を再確認することができました。また、地域における連携では、専門職等の関係者だけでなく、ボランティアや地域住民など様々な人の協力が不可欠であることを感じました。私は、人が持つ力が新たな力を生み出し、人を支えていくのではないかと思います、これがまさに地域福祉の目指すべき姿だと考えています。

現在、私は、ひきこもりや不登校の子どもたちへのボランティア活動をしており、子どもと対等な立ち位置で接することを心がけています。今回の実習で学んだ「人の持つ力、新たな力を生み出すことの大切さ」を今後のボランティア活動に活かし、自らの成長につなげていきたいと考えています。

## 臨床実習を終えて

医療情報管理学科 3年 東都 恵介



私は、8月に新潟市西区にある済生会新潟第二病院で1週間実習をさせていただきました。実習では、診療情報管理士の業務のほか、ドクターズクロークの体験や院内がん登録、診断書の作成など幅広く体験させていただきました。

今回の実習を通して感じたことは、教科書や問題集を使った普段の資格試験対策と、実際に体験した業務との間に大きなギャップがあるということです。例えば、コーディングを一つこなすのにも普段の問題集などとは違い、診療録の隅々から情報を拾う必要があるので、難しい医療用語も多くとても苦勞しました。また、同じ名前の疾患でも診療録への書き次第では治療方法が異なることもあるため、幅広い医学知識と臨機応変に対応する力も求められると感じました。

診療情報管理士の業務は私の想像よりも複雑で難しいものでしたが、より良い医療を提供するために診療情報管理士として活躍したいという思いが強くなりました。2月には資格試験があるため、今回の実習を通して学んだことを活かし日々努力し、資格取得を目指していきたいです。

どんどん広がる international exchange ✈

# 国際交流のWA!



これからの保健・医療・福祉・スポーツを「創造」し、豊かな感性と幅広い視野を身に付けることを目的に、開学以来、積極的に国際交流を進めてきました。その国際交流の一部をご紹介します。

## JICA 研修実施報告

平成25年10月24日(木)～平成25年11月22日(金)に渡り、独立行政法人国際協力機構(JICA)の要請を受け、フィジー共和国、ソロモン諸島、パナマ共和国の3か国から11名の研修員を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を行いました。本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、生活習慣病予防に必要な看護学、栄養学、運動指導、リハビリテーションのすべてに関する教育・研究を実施していることから、大学として日本で唯一、研修実施機関として選定され、JICA受託事業として研修員の受け入れ、学内外での研修を行っています。その研修プログラムの一部をご紹介します。

pick up!

## JICA 研修プログラム紹介

### 地域住民を対象にした運動教室

健康スポーツ学科 講師 佐藤 大輔

日本で実施されている生活習慣病対策を紹介するプログラムとして、本学が主催している「地域住民を対象にした運動教室」を体験していただきました。

研修員は、ウォーキングを中心に、ステップエクササイズ・エアロビクス・レジスタンストレーニングなど様々なプログラムを楽しんでいるようでした。

終了後には、「なぜ心拍数を測っているのか?」「どのように運動強度の設定をしているのか?」といった質問もあり、有意義な時間となりました。



### 健診と結果の診断方法(WHO方式)

看護学科 准教授 宇田 優子

身長、体重、腹囲の測定、BMI算出、血圧測定、随時血糖測定と視力測定(説明のみ)について実習しました。生活習慣病予防の対策を立てるには、正確な結果が必要だからです。実習は、昨年の研修員が作成した検査方法を説明しているDVDを鑑賞し、手順を確認することから始まり、医師・看護師の研修員が非医療職研修員(教育関係者等)をリードして、和気藹々と進みました。

講義以上に、質問や教えあう姿があり、研修員間の交流を図る機会にもなっていることを実感しました。



### 栄養教育の方法(調理・国自慢バイキング)

健康栄養学科 講師 岩森 大

自分の食事の適量とバランスを理解するための学習方法を修得し、栄養教育の教材作成の基本的スキルを身につけることを目的としました。

実習では、研修員が自ら自国の料理を作り、できあがった料理をバイキング形式で「食べたいだけ」選択します。その後、食べ量をチェックし、「自分にとって必要な食事量」と比較します。過不足を考えるにあたり、目分量、重量、kcal量など様々な角度から理解することで、一食の適量をバランスよく示す手法を理解できました。

研修員は、徐々に自国の料理を学生と共に作り食べたことで、交流も深めることもでき、とても喜んでくれました。



今年度のJICA研修では、上記以外にも学内での各種研修プログラムのほか、新潟県庁や新潟市役所への表敬訪問、病院見学、佐渡市教育委員会や小学校などとの交流、新潟観光など、様々なプログラムを実施しました。研修終了後は、研修で学んだ成果を各国の関係者に普及する予定となっています。

## JICA×新潟医療福祉大学大学院 国際協力機構(JICA)・ 新潟医療福祉大学大学院連携 青年海外協力隊等プログラム

プログラムの  
目的

本プログラムの大学院生は、修士課程に在籍しながら青年海外協力隊等の隊員として派遣国で活動します。現地活動中も指導教員および本研究科教員の指導を受けることができ、国際協力現場での実践を通じて、国際保健協力に関わる人材としての資質・能力を高めることを目的としています。  
詳細に関しましては、大学院入試事務室(025-257-4455)までお気軽にお問い合わせください。

日本初!

修士課程に在籍しながら  
青年海外協力隊等の隊員として  
派遣国で活動できるプログラム



## 全国少年警察学生ボランティア研修会代表発表報告

NEWS 01

9月4日に東京で開催された、第25回全国少年警察学生ボランティア研修会にて、本学社会福祉学科4年生の古木 綾乃さんが代表発表をしました。

今研修会は、少年警察学生ボランティア制度のもとで行われているもので、少年の非行防止や健全育成の活動に若い人材も参加してもらうために、各都道府県警察が働きかけて実施されています。古木さんは、今年の2月から活動をしていましたが、4月に新潟県警より正式に委嘱され、新潟県警察大学生サポーターとして、街頭補導活動や広報活動、少年の居場所づくり活動を行っています。

研修会のパネルディスカッションでは、ほかの都道府県で同様の

活動をしている5人の大学生と共に、パネラーとして普段行っているボランティア活動の報告をし、その後、大学生ボランティアとしてできることについてのディスカッションに参加しました。

古木さんは、大学生サポーターとして守らなければならないことを踏まえて、少年と適切な距離感を持った関係で交流する大切さについて堂々と発表を行いました。また、警察でもなく、大人という枠組みからも微妙に外れる大学生という立場から、少年たちの悩みを受け止めて、一緒に考えるボランティアを目指したいとの決意を表明し、締めくくりました。

## 第37回日本神経心理学会で研究発表を行いました

NEWS 02

9月12日(木)～13日(金)の2日間、札幌市の札幌コンベンションセンターを会場に「第37回日本神経心理学会」の学術集会在開催されました。

神経心理学は、記憶、言語、聴覚・視覚認知、行動などの機能とその障害を研究の対象とする分野です。日本における中心的な学術組織の一つである本学会では、100題を越える多数の研究発表のほか、教育講演やセミナー、シンポジウムも開催されました。

言語聴覚学科の卒業生たちも、毎年この学会で研究発表を行っています。今年は1期生、6期生、8期生各1名、9期生6名に加え、学科教員の指導のもと、4年生の小柳 佳乃さんと研究発表「SPECTで右側頭頂葉に集積低下がみられた変性疾患性認知症の一例」を行いました。

また、言語聴覚学科の今村 徹教授がランチョンセミナー「認知症のリハビリテーション：家族、介護者のエンパワメントを中心に」の講

演を担当しました。

臨床の現場で自分がまとめた研究について、学会に参加された先生方の質問に答え討論することで、若い言語聴覚士の臨床の力はさらに大きく育っていきます。言語聴覚学科では、そのプロセスがとても重要であると考えており、今後も卒業生の学会発表を積極的に支援していきます。



## 産学連携による新潟の元気と健康を応援する『健菜御膳』の販売

NEWS 03

【新潟医療福祉大学(健康栄養学科)】×【新潟アルビレックスランニングクラブ】×【株式会社キタカタ】による、新潟の健康増進に寄与することを目的とした『健菜御膳』が、第4弾として10月1日(火)より越後茶屋全店舗にて販売開始となりました。

この『健菜御膳』は、地域の健康づくりを応援する新潟アルビレックスランニングクラブが、“食・栄養”の側面からも地域の健康を応援したいとの呼びかけに、本学と株式会社キタカタが賛同する形で、2011年10月にスタートしました。

第4弾となる今回は、『低カロリー』をテーマに、旬の食材を使うことで、目で見て季節を感じ、「身体の中までおいしい」と思ってもらえるメニューの開発に尽力しました。越後茶屋の調理師さんやスタッフの皆さんにもアイデアをいただきながら、いろいろと意見を出し合った結

果、「秋風吹き寄せ焼御膳」と「紅葉の秋サバ御膳」に決定しました。また、地域貢献活動として地元農家が生産した米と野菜を使用することにこだわりました。

今後も、企業・トップスポーツ団体・大学が、「健康増進・地域貢献」「教育・研究」それぞれの視点から連携を図った取組みを通じて、新潟の“元気”と“健康”に寄与したいと考えています。



## 森脇 健介 講師が「日本骨粗鬆症学会 第8回 森井賞」を受賞しました

NEWS 04

10月13日(日)、医療情報管理学科の森脇 健介 講師が公表した研究論文が「日本骨粗鬆症学会 第8回 森井賞(学会名称：一般社団法人日本骨粗鬆症学会)」を受賞しました。

森井賞は「国内で行われた骨粗鬆症に関する臨床研究論文のうち、特に優れた成果を示した論文(原則として年度1編)」に授与されるものです。

従来、日本における骨粗鬆症領域の医療経済評価は限定的でしたが、本研究では疫学データに基づき日本人女性における脆弱性骨折の発生に関する数理モデルを開発し、骨量減少がみられる女性に対する骨折予防治療の開始基準について、費用対効果の観点から評価を行ったものです。今後、日本における骨粗鬆症治療分野の様々なリサーチ

クエストンに対し、医療経済の視点から示唆を与える重要な学術的基盤となることが期待されます。

医療情報管理学科では、専門資格の取得教育だけでなく、日常診療上あるいは医療政策上の意思決定に資するような研究活動も行っています。

森脇講師の研究論文は、以下の雑誌に掲載されています。

雑誌名: Journal of Bone and Mineral Research, Vol.28, No.2, pp395-403, 2013

論文名: Cost-Effectiveness of Alendronate for the Treatment of Osteopenic Postmenopausal Women in Japan

# 伍桃祭を終えて

## 第13回伍桃祭(大学祭)報告

今年の伍桃祭のテーマである、「Hands in Hands ～つながる想い～」には、多くの方々との出会い、人と人との想いをつなぎ、この伍桃祭をきっかけに日々の感謝や想いを、友人・家族・諸先生方・地域の方々など、自分とつながっている人に伝えてほしいという願いを込めました。

当日は、SKY-HIのライブ、ホームカミングデー、Ms.&Mr.コンテストやクラブ・サークルによるパフォーマンス、模擬店、そして新イベントとしてチーム対抗クイズ大会やスタンプラリー、出店グランプリ等々、多くのイベントを通して、来ていただいた方々と一緒に盛り上がることができ、楽しく開催できたと思います。

最後になりましたが、無事に伍桃祭を終えることができたのも、学生や教職員の方々をはじめ、地域の方々や企業の方々など、多くの方にご協力いただいたおかげです。そして、一緒に企画・運営をしてくれた学友会・伍桃祭実行委員に感謝しています。ありがとうございました。

第13回伍桃祭実行委員長 兼学友会副会長 小林 弘樹



# 受験生のみなさんへ

## 春のオープンキャンパス 3月21日(金)

新2・3年生に向けて、「大学概要・入試概要説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「体験プログラム」など様々なプログラムを用意しています。また、保健・医療・福祉・スポーツ分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報が満載の「進学総合ガイダンス」など春のオープンキャンパス限定のプログラムも計画しています。どうぞお気軽にご参加ください。



## 一般入試(前期日程・後期日程)案内

- 「第2志願制度」の活用により、一度の出願で第2希望学科まで受験可能。  
※前期日程では、「理学療法学科」「臨床技術学科」「看護学科」を第2志願とすることはできません  
※後期日程では、「理学療法学科」「臨床技術学科」「看護学科」「医療情報管理学科」を第2志願とすることはできません
- 前期日程では全国8都市、後期日程では全国4都市に試験会場を設置。  
(前期日程会場:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡・仙台)  
(後期日程会場:新潟・東京・郡山・鶴岡)
- センター試験利用入試との「併願」が可能。
- 前期日程の成績上位50名程度を「特待生」として、1年次の授業料全額免除。
- 後期日程では英語・国語の「2科目」で受験可能。

### ■募集人員

学 科	前期日程	後期日程
理学療法学科	26名	10名
作業療法学科	14名	2名
言語聴覚学科	17名	2名
義肢装具自立支援学科	13名	2名
臨床技術学科	42名	4名
視機能科学科	15名	2名
健康栄養学科	15名	2名
健康スポーツ学科	35名	5名
看護学科	40名	2名
社会福祉学科	35名	3名
医療情報管理学科	20名	2名
計	272名	36名

### ■入学選考試験日程

試験区分	出願期間	試験日
前期日程	1/8(水)～1/22(水) [消印有効]	2/5(水)
後期日程	2/12(水)～2/21(金) [消印有効]	3/5(水)

### \*東日本大震災、長野県北部地震、福島第一原子力発電所事故により被災された方へ

平成26年度入学選考試験において【入学検定料免除】及び【授業料減免】の被災者修学支援措置を講じております。詳細につきましては、入試事務局(TEL:025-257-4459)までお問い合わせください。



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地  
TEL025-257-4455(代) FAX025-257-4456  
URL <http://www.nuhw.ac.jp/>  
携帯サイト <http://www.nuhw.ac.jp/m/>  
【入試事務局】TEL025-257-4459  
E-mail [nyuusi@nuhw.ac.jp](mailto:nyuusi@nuhw.ac.jp)

### 誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポーター)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。

